

鹿児島県南薩地域における国産広葉樹の活用

鹿児島森林管理署 谷山森林事務所 首席森林官 嶋 徹矢
一般職員 一川 彩華
森林技術指導官 宮本 和久

1 課題を取り上げた背景

鹿児島県南薩地域は、全国の鯉節生産量の7割を占めており、令和4年度では鯉節生産量17,723 tに対し推定47,000 m³の広葉樹の薪が使用されています。

この鯉節生産に欠かせない薪ですが、近年民有林からの入手が困難となっており、地元の加工組合から国有林の広葉樹を供給して欲しいとの依頼がありました。

2 取り組みの概要・経過

(1) 国有林からの広葉樹供給

近年、国有林では、天然広葉樹林からの広葉樹の供給はほとんど行われていない状況です。地元の鯉節加工組合からの要望もあり、地元の指宿市長及び枕崎市長の意向も改めて確認したうえで、試行的に令和5年9月下旬に広葉樹の立木公売を実施しました。

国有林での天然広葉樹林の立木販売は珍しいということで、木材の業界新聞でも紹介されました。



写真1 鯉節加工工場の薪集積所



写真2 枕崎市との対談

(2) 入札状況

入札結果令和5年度においては、入札結果は、2物件、2,300 m³の立木が1 m³あたり平均税込み価格1,000円強で落札されました。

令和6年度は、広葉樹を扱う事業者が多数入札参加資格を取得しており、7社の事業者が入札参加しました。

また、計画初年度の令和6年度は3物件、3,300 m³の広葉樹の立木公売を10月に実施し、結果は、すべて落札され平均税込み価格1 m³あたり2,000円と昨年より1,000円高で落札されました。

今後の安定的な供給の継続に確かな手応えを感じているところです。



写真3 立木販売入札状況

3 実行結果

(1) 立木販売された林分での作業状況

立木販売された林分の作業は、伐倒・集材・玉切りはチェーンソー及び林業機械で行われます。そして、現地で各鯉節工場のニーズに応じた形状に合わせ各工場専用パレットに積み込み、各工場へ直送されます。

この現場は、約5haでおおよそ10ヶ月間、3名程度を雇用し続けることができました。これは、単に低質材を伐採しているのみならず、現場でパレット入りの薪という最終製品に仕上げ付加価値をつけて直送しているためであり、薪生産の大きな特徴です。

また、形状も良くない低質材中心でありながら、残材が極めて少ないのも特徴のひとつです。これは、通常低質材の2m採材とは異なり、薪用は現場で50cm長にするため、歩留まりが良いということです。

そして、国有林としての特徴は、南薩地域の民有林の薪伐採現場は1ha未満のものが大半で、また、隣接所有者の了解を得る必要がある一方、国有林の現場は広く、隣接所有者の了解の取り付けも不要であることから、民有林と比べてとても効率的であり、今後とも国有林からの出材を行って欲しいと伐採業者からも意見が寄せられました。



写真4 薪生産用玉切作業



写真5 現場においてパレットに集積される薪

(2) 更新関係

南薩地域は以前からシカの生息密度が他の地域に比べて少ないことから、広葉樹の萌芽更新状況が良好であり、周辺の民有林においても伐採後、何の手も加えることなく萌芽更新が行われ、繰り返し天然広葉樹林が薪材として利用されている状況です。

国有林公売箇所においても、伐採から一月もすれば萌芽が見られ、10ヶ月程度で早いものでは約60cmとなっており、九州森林管理局天然更新完了確認調査要領に基づき調査したところ、



写真6 伐採後10ヶ月後の更新状況



写真7 伐採10年後の状況（近隣林分）

1 ha あたり約 12,000 本の旺盛な更新結果が確認されました。

（２） 更なる広葉樹の安定供給

試行的な令和 5 年度の広葉樹供給は、地域からも木材業界新聞からも好意的に受け止めていただきました。また、萌芽更新も見込めることから、本格的に安定供給を行うべく、南薩森林計画区第 6 次施業実施計画では、令和 6 年度より 5 年間で 16,489 m³の広葉樹を供給することとしました。

4 考察

我が国の森林は、針葉樹を中心とする人工林の成熟期を迎え、直近の自給率は 43%にまで回復しています。

広葉樹につきましては現在、需要量は 2,000 万 m³程度であり、国内の蓄積は 16 億 m³ありますが、国内素材生産量についてみますと、昭和 40 年代には 2,000 万 m³近くあったものが、令和 5 年には 170 万 m³に激減しています。広葉樹専門の製材所はほとんど姿を消し、広葉樹伐採の技術を有する者は大幅に減少し、旧薪炭林は高齢級化により萌芽更新能力が低下しつつあります。

このままでは、国産広葉樹を利用する技術や文化が失われかねない状況にあると思います。

国有林においても、天然広葉樹林を安定的に供給している局署は全くない状況です。これは、昭和終わり頃に自然保護の機運が高まったことの影響ではないかと考えます。

このような中、地域ニーズに真剣に向き合い、天然広葉樹の安定供給を開始することができました。

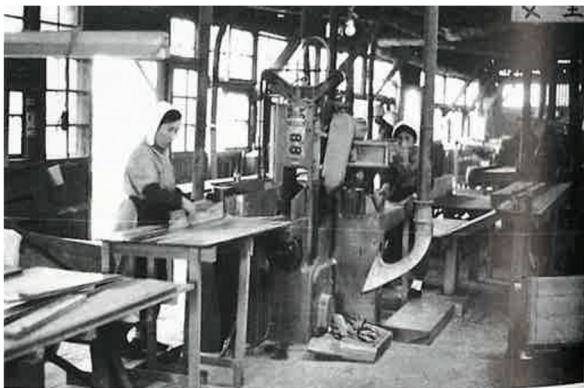


写真 8 昭和 30 年代の広葉樹専用製材所
(鹿児島森林管理署直営鹿児島木工所)



写真 9 東北森林管理局
鹿児島大学生との合同勉強会

5 まとめ

立木販売で収入を得つつ、萌芽更新により、植栽・保育経費も掛からないという、収支面でも極めて有益です。

地域のニーズ及び林齢やシカの生息密度を考慮した更新の確実性といった地域の状況を見極めながらですが、可能な範囲で、できるだけ広く取り組まれるべきものであると考えます。

国有林からの天然広葉樹林の安定供給の先駆けとして、また地域のニーズに応える出材を行うべく、本取り組みをこれからも進めて参りたいと思います。